洋１２－１２２

# 「声をかくす人」　　＊＊＊＊＊

２０１２（平成２４）年１１月１０日

鹿賀>

監督・製作：ロバート・レッドフォード
フレデリック・エイキン（元北軍の英雄、メアリーの担当弁護士）／ジェームズ・マカヴォイ
メアリー・サラット（リンカーン暗殺の容疑者、南部出身の女性）／ロビン・ライト
エドウィン・Ｍ・スタントン陸軍長官／クウィン・クライン
リヴァデイ・ジョンソン上院議員（元司法長官）／トム・ウィルキンソン
アンナ・サラット（メアリーの娘）／エヴァン・レイチェル・ウッド
ジョセフ・ホルト法務総監（検事）／ダニー・ヒューストン
ニコラス・ベイカー（フレデリックの親友）／ジャスティン・ローグ
ヴァデイ・ハンター将官／コルム・ミーニイ
サラ（フレデリックの恋人）／アレクシス・ブレデル
ウィリアム・パミルトン／ジェームズ・パッジ・デール
ジョン・サラット（メアリーの息子）／ジョニー・シモンズ
ジョン・ウィルクス・ブース（リンカーン暗殺の主犯、俳優）／トビー・ケベル
ルイス・ワイクマン／ジョナサン・グロフ
ルイス・ペイン／ノーマン・リーダス
２０１１年・アメリカ映画・１２２分
配給／ショウゲート

**＜あの「リンカーンもの」はイマイチだが、これは必見！＞**

去る９月日に観た「リンカーン／秘密の舞」（１２年）は「リンカーンはバンパイアだった」という奇想天外な仮説にもとづくもので、大活劇としての楽しさはあったが内容的にはイマイチだった。「三国志」において主人公の「劉備玄徳は女であった」という大胆な仮説にもとづいてつくられたのがスーパー歌舞伎の「新三国志パート１」だったが、このような奇想天外な仮説自体は面白い。それに対して、同じ「リンカーンもの」でも、本作はリンカーン大統領を直接描くものではなく、リンカーン大統領の死にから物語はスタートする。

リンカーン大統領が１８６５年４月１４日コマード劇場で暗殺されたのは有名な話だが、本作はこのリンカーン大統領の暗殺に参加したという理由で、アメリカ史上初の死刑とされた実在の女性メアリー・サラット（ロビン・ライト）と、その弁護人であり北軍大尉でもあったフレデリック・エイキン（ジェームズ・マカヴォイ）の姿を描くもの。メアリーは民間人であるけれども軍事裁判（軍法会議）で裁かれ、１８６５年７月５日に有罪となって死刑判決を受け、２日後の７月７日に絞首刑が執行されたそうだが、それは一体なぜ？私は弁護士として４０年近くさまざまな裁判に関与してきたが、当然ながら軍法会議に関与したことはない。なぜ一般人の、しかも女性であるメアリーが軍事裁判で裁かれ、死刑になったの？そんな歴史の１コマを、映画評論家としてはもとより、弁護士としてもしっかり本作で確認しなければ。

**＜軍法会議のシステムとは？弁護人の使命とは？＞**

平和な国ニッポンに生まれて平穏な生活を送っている私は、前述のように軍法会議などもの凄くに関与したことがないから、そのシステムを知るのは専ら映画しかない。そこで参考になるのが「ジャスティス」（０１年）、そこではコリン・ファレル演ずる２６歳のアメリカ人軍人ハート中尉がナチス・ドイツの捕虜収容所内で人種差別問題から起きたある殺人事件について、陪審員はすべてナチスたちという状況下で、弁護人としてたったひとりで正義の実現の道筋を探く求め続けていた。実は今の裏では恐るべき民度計測が企画されていたのだが、それは私の評論で（「シネマルーム２」１９４頁参照）。

その程度でも「軍法会議」に関する知識があれば、リンカーン大統領暗殺事件の「軍法会議」を仕切るのが、陸軍省のエドウィン・Ｍ・スタントン長官（クウィン・クライン）であるようなことに納得できる。まずスタントン陸軍長官は長刑官に配下の北軍将校９名を選んだうえ、ホルト法務総監（ダニー・ヒューストン）を選んだ。すると、そもそも軍法会議は最初から「有罪ありき」の出来レース？

そもそも軍法会議で当初メアリーの弁護人になったのが、元司法長官のリヴァデイ・ジョンソン上院議員（トム・ウィルキンソン）という大物だったのは意外だ。そもそも大物がなぜメアリーのような「国事の敵」ともいうべき女性の、しかも負けが決まっている裁判（？）の弁護人を引き受けたのか？私はそれが不思議だったが、本作ではまず、彼の引動やセリフの中に、さすが民主主義の国と思える建国当初のアメリカのカッコよさをしっかりと味わいたい。

**＜なぜフレデリックが弁護人に？弁護人の使命とは？＞**

ところが、メアリーの弁護人だったジョンソン上院議員が、なぜか南北戦争で北軍の将校として修羅場をくぐり抜けてきたフレデリックをメアリーの弁護人になるよう説得し始めたところから、本筋のストーリー展開が始まる。メアリーの弁護人をやるとういうことは、日本でいえば古くは才ひん真理教の麻原彰晃呼び殺傷事件の林真須美の弁護人を、近時では尼崎事件として有名な「女親分」角田美代子容疑者の弁護人を、大先輩から「俺のイバリりにやってくれ」と言われるようなものだから、誰でもそれを断るのは当然。ならばなぜ、フレデリックがこの人並みの北軍の将校や北部の民間人と同じ感覚で、リンカーン大統領を暗殺した犯人たちに対して大いなる怒りと憎しみを抱いていたからだ。

しかし、そこでジョンソン上院議員がフレデリックに説いたのは、刑事事件にお行る基本的な弁護人の姿勢。さらに「彼女の弁護は無理です」と訴えるフレデリックに対して、ジョンソン上院議員が言い渡したのは「彼女の有罪を証明したら、弁護人を降りている」ということだった。メアリーからの事情聴取は必ずもしスムーズに進行しなかったろう。メアリーの娘アンナ・サラット（エヴァン・レイチェル・ウッド）もなぜかフレデリックに対して仲協力的。これではフレデリックがメアリーの無実を確信することができないのは当然だ。それぞれが、逆にしている メアリーの息子ジョン（ジョニー・シモンズ）のことになると口を閉ざしてしまうメアリーを見ていると、むしろ「メアリーは有罪では？」と考えざるをえないのが実情だったが、それを証明するまでに至らなかったのも残念。私なら状況下であっても、なぜメアリーが軍法会議で裁かれるの？メアリーは本当にリンカーン暗殺を共謀したの？下宿屋を営むメアリーが北部やリンカーンに不満と敵意を抱いている南部の男たちに対して部屋を提供しただけで罪になるのはおかしいのでは？フレデリックが弁護人として、そのようにまともに考え始めると・・・